

遭難

烈風が吹き荒れ、山のような波が襲い、船は木の葉のように弄ばれていた。漆黒の闇に雷光が光り、恐怖に満ちた船員の顔を浮かび上がらせた。風の唸り声が不気味に静寂の闇に木霊したかと思うと突き刺すような豪雨が船体を打ちつけた。大きなガレオン船（外洋帆船）の三本マストの帆は当然すでにたたんである。しかし、太いマストがむちのようになっっている。ここは一体どこなのだ。船員達には皆目分からない。今から四百年前の一六〇九年九月三十日の夜のことである。

このガレオン船の名はサン・フランシスコ号。今のフィリピン、ルソン島カピテ港を出港し、太平洋を北へ向かい偏西風に乗って太平洋を横断し、メキシコ、アカプルコに着港する予定であった。大航海時代。フィリピンもメキシコもスペイン領でヌエバ・エスパニアと呼ばれ、一五一九〜一八二一年まで北アメリカ大陸、カリブ海、太平洋、アジアに

跨がるスペイン帝国の副王領地。その首都はメキシコシティであった。

七月二十五日、サン・フランシスコ号、サン・アントニオ号、サンタ・アナ号の三隻は、フィリピン、カピテ港を出港。しばらく晴天が続き、極めて順調な航海であったが、八月十日より、日本の遙か南を北に向かい始めた、ラドロン諸島近辺で、台風に遭遇し、それからは行き先を完全に失い、六百七十トンの大型ガレオン船といえども、動力船ではないから、なすすべもなく翻弄されていた。

船員は、ほとんどスペイン人で彼らはいずれも幾度も太平洋横断の経験がある屈強な船乗りもいた。しかし、今はただ恐怖におののくばかり。そしてこの船にはフィリピンの臨時総督長官の任期を終え、ヌエバ・エスパニアの首都メキシコシティに帰国するドン・ロドリゴが乗船していた。彼は聡明で公正な人格者。スペイン本国の陛下の信任篤く、ヌエバ・エスパニアに派遣されていたのであ

る。一瞬彼は後悔した。三月出航の予定が書類手続きの遅れで七月まで足止めされたこと、艦隊司令官が七十歳の高齢で不安視していたことを、それに航海用の海図が酷く間違っていたことを。とにかくどこにいるのか分からない。太平洋のただ中だろう。とにかく暗くて何も見えない。外を見る余裕もない。どこか島に漂着してくれれば。いや、そんな幸運は万に一つもあるまい。船は、途方もなく高い波に持ち上げられ、谷に突き落とされるように落下。強風で船は傾き、海に引きずり込まれる。船は断末魔の軋みを上げている。このままばらばらになるのか。怒号に混ざって祈りの声が聞こえる。とその瞬間、轟音と共に船が突然止まり、みんな吹っ飛んでいろいろなところに身体をぶつける。海に放り出された人もいるに違いない。ロドリゴも壁まではじき飛ばされ、いやというほど身体を打ちつけた。気がつく足下に多量の海水が流れ込んでいる。座礁だ。船体は砕け散る寸前

である。船は傾き、壊れ、数人の船員が暗闇の波に投げ出される。甲板をころげ、手に触るものがなんであれ、しがみつき、阿鼻叫喚の声があちこちで起こる。ロドリゴも海に投げ出され、死を覚悟したが運良く、沈んだ身体が浮いたところに船の破片が流れてきてしがみつく。いつもは勇敢な者達だが、今は、帆綱や縄にすがり、祈りを捧げ、死を待つ状態。そうこうしている間に、夜が少しづつ明けてきた。前を見ると、ぼうつと陸地のような陰が見える。ロドリゴは、何という奇跡だと思った。大声を上げ、船の破片にしがみついている船員を励ましきながら、陸地を目指せと泳ぐ。ある者は、傷だらけになりながら、また、ある者は、瀕死の者を抱えながら、破片と共に浜に流れつく。ロドリゴは直属の部下アントンの姿を見つける。「総督無事でしたか」。彼はあちこちの岩場にぶつかり傷だらけであったがともかく元氣そうである。そうこうしているうちに大勢のけが人が浜にた

どり着きゼイゼイ息を切らしている。けが人を背負つて来る者もいる。

そこは狭い砂浜が連綿と続き、その背後には高い岸壁が連なっている。沖を見ると、壊れた船が岩礁に揺れている。船には二百万ドウカドの財産が積み込まれていた。ロドリゴの財産も積んである。しかし、彼は、そんなものはもうどうでも良かった。一番大切な命という財産を得て、神に感謝した。しかし、ここがどこだか分からない。無人島なのか、太平洋のどこかの島なのか。しかし、ともかく陸地にたどり着いた。

アントンは生存者の人数を確認する。船に乗っていた者、三百七十三名。浜には二百名近くが確認できたが、皆、身一つである。のちのちの結果からすれば、そのうち五六名は波にさらわれたか、死亡。浜にいる者も衰弱が激しい。

ロドリゴは、すぐにここがどこの島なのかを含め、ともかく辺りを調べるよう比較的元

気そうなる二人に命じる。しばらくすると、「稲田を発見しました」との報告が入る。すると今度は、丸裸同然の自分達が襲われでもしたら、ひとたまりもないという不安がよぎった。そうこうしているうちに「日本人が現れました」との報告が入る。五、六人の日本人がやってきて、身振り手振りできかんに同情と哀惜の態度を示している。ロドリゴは船に同乗していた日本人を思い出し、彼を呼び寄せた。この日本人はヌエバ・エスパリーニアに帰化し、共にメキシコに行くことになっていたのである。彼にここがどこかと尋ねさせると「日本のユバンダ（岩和田）」だということが分かった。

ロドリゴは、それを聞いた途端、再び神に感謝した。なんと幸運にも日本に漂着したのか。ロドリゴは、日本人をよく知っていた。ヌエバ・エスパリーニアで、複数の日本人が暴動の罪で逮捕され、処刑されるところを、彼が再調査してみると、日本人側に正当な事実

があることを発見。ただちに彼等を釈放し、船と金銭を与え、日本に帰国させたことがあった。そして大御所（徳川家康）より感謝状を受け取っていたからである。

一六〇九年九月三十日、嵐で漂流、難破。奇跡的に、たどり着いた処が、幸運にも日本の、上総国夷隅郡岩和田の田尻海岸であったとは。

この遭難事故が、後々の日本とメキシコの特別、親密で友情に溢れた友好関係の始まりであり、友好の絆に発展していくのである。しかし、浜にあえぐ人々の誰が、このことを想像し得たであろうか？

■ 写真1：ドン・ロドリゴ遭難地：千葉県御宿町岩和田田尻海岸

■ 資料1：御宿、岩和田遭難地と御宿地図：御宿町観光協会資料館：右下が田尻海岸「ドン・ロドリゴ上陸の地」

■ 資料2：帆船サン・フランシスコ号模型：御宿町歴史民俗資料館

【参考資料】

在日メキシコ大使館「条約から条約へ」墨日関係史ノート

「ドン・ロドリゴの日本見聞録」安藤操 意訳・解説

たにぐち書店

「ドン・ロドリゴの幸運」 日本・メキシコ交流の始まり 小倉昭・作 山口ま

さよし・絵 汐文社

「ドン・ロドリゴ物語」 金井英一郎書 新人物往来社

インタビュー先…清酒「岩の井」醸造元 岩瀬酒造株式会社代表 岩瀬能和、

ふるさと文化研究会理事長 安藤操